

VII 標識放流調査

タイワンガザミの種苗放流を実施する際の放流方法や放流量を決定するのに、放流群が加入する天然群がどの範囲に分布し、どの程度の資源量であるかを知ることは重要である。そのためには、まず対象海域の個体群の分布範囲を推定しなければならない。また資源加入後のタイワンガザミがどのように漁獲されるか、あるいはどのような移動をするかを調べることは、放流群の資源加入後の動向を知るうえで必要である。そのようなことを明らかにするため、天然群の標識放流を実施した、本調査は今後数年間は継続して行なう予定である。

1 材料と方法

標識放流に用いたタイワンガザミは図20に示したA, C, D, Eの4ヶ所で漁獲したもので、使用した漁具はAではカニ籠、その他の場所ではカニ刺網であった。各地点で漁獲したカニはその日のうちに同一場所に放流するようにしたが、Eで漁獲したものはBに放流した。Aでは9月21日に甲幅90~160 mmのものを15尾、Bでは10月10日に甲幅105~180のものを88尾、Cでは10月11日に甲幅95~150 mmのものを112尾、Dでは10月11日に甲幅95~150 mmのものを86尾それぞれ放流した(表13)。甲幅組成から判断して、A放流群は当オガニと1オガニ、B放流群は1オ以上のカニと当オ早期生まれのカニ、C, D放流群は当オガニであったと考えられる(図19)。

放流個体には標識として速乾性のマジック(耐光, 耐水性)で背甲に数字をかいた。

また再捕情報を入取するために金武湾・中城湾沿岸の漁協(図15)に記録用紙を配布し、再捕日、再捕者名、再捕個体の番号、再捕場所の記載を依頼した。

表13 標識放流した天然ガニの放流数と大きさ

放流日	放流場所	放流数	(♀・♂)	甲幅 (mm)
1984. 9. 21	A	15	(6・9)	92.5 - 158.6
" 10. 10	B	88	(29・59)	109.2 - 178.6
" 10. 11	C	112	(41・71)	96.2 - 148.2
" 10. 11	D	86	(30・56)	95.8 - 150.0

2 再捕状況

放流翌日から1985年1月末までの再捕状況をまとめた。A放流群は放流後15日目に1尾再捕されたのみであった。B放流群は放流翌日から再捕され、以後2週間目の10月24日まで継続して再捕された放流後2週間以内に再捕されたカニは放流数の23.9%にもあたる21尾であった。その後は28日後、48日後、42~51日後、87日後にそれぞれ1尾ずつ再捕されたのみである。C放流群は放流後2日目から再捕され34日後まで再捕があった。しかし、Dから放流したタイワンガザミは今までに再捕されたという報告はない。また、11月21日に番号不明(標識番号記載欠落のため)の放流個体が2尾再捕され